



『ミットレーベン』が意味するもの(資料)

國本, 真吾

(Citation)

日本特殊教育学会第53回大会(2015宮城大会) 自主シンポジウム29 糸賀一雄『ミットレーベン 故郷・鳥取での最期の講義』(1968 講義/2014 発行)を読み解く : 糸賀一雄研究(2)

(Issue Date)

2015-09-19

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006473>



『ミットレーベン』 が意味するもの

糸賀一雄『ミットレーベン 故郷・鳥取での最期の講義』
(1968講義/2014発行)を読み解く-糸賀一雄研究(2)-



鳥取短期大学幼児教育保育学科
准教授 **國本 真吾**



糸賀一雄生誕100周年記念出版

ミットレーベン

故郷・鳥取での最期の講義

1968年1月18日、鳥取県立皆成学園(倉吉市。障害児入所施設)で行われた、約3時間分の講義が録音されたオープンリールのテープをもとに文字化したもの

鳥取県障がい福祉課のHPからPDFファイルでダウンロード可能

<http://www.pref.tottori.lg.jp/247318.htm>

鳥取での講義概要

- ・「ミットレーベン」
- ・リハビリテーション
- ・一隅を照らす人、その人こそ国宝なり
- ・精神薄弱対策の遅れ
- ・イデオ・サバンの礼賛
- ・国民代表としての花森安治の言葉
- ・発達保障の願い
- ・集団指導と近江学園の取組み
- ・「夜明け前の子どもたち」
- ・【質疑】精薄というレッテルへの向かい方

注)上記の表題は國本による整理

一隅を「照らす」=省察

私たちの心の奥底にね、何かこれは間違っているということをね、囁くものがあるから、そこから来る悲しみや怒りではないでしょうか。それが何だろうということ、私たちは、やっぱり静かに我が心の一隅を見つめてみる必要があると思いますね。我が心の一隅を照らしてみる必要があると思うんです。どこから来る悲しみや怒りでしょうか。そして、それは、私たちの生活の中で、生活という一隅の中で、どんな風に行動したらいいかということを考えさせてくれるものだろうと思うんですね。(pp.13~14)

行動的思考の強み

けれども私たちは、びくともしない。本当にその一隅を照らし続けることができる。それは、何によってでしょうか。ヒューマニズムによるものでしょうか。そうですね。ヒューマニズムですね、これは。確かにヒューマニズムです。しかし、ヒューマニズムというのは、一体どういうものなんでしょうか。ヒューマニズムの正体は、何でしょうか。そういうことを、この仕事を通して、私たちは考えさせられるわけなんです。むしろ、ヒューマニズムをヒューマニズムたらしめるもつと根本があるんじゃないかという、その根本にまで私たちの考えを深めさせてくれる。深い性格というものが、ここで私たちに与えられます。それがあの、こういう仕事に従事している。体ごと従事している中から考えさせられることなんです。行動的思考なんです。行動をやめて、立ち止まって眺めている思想ではありませんね。そこに強みがあります。何と言っても強みがあります。(p.31)

楕円の奏でるトーン

人間は誰でも、ひとつの基本的な基調、トーンを持っています。そのトーンとトーンが違いますね。Aの人とBの人とは違うんです。

(中略)

二つのね、核があって、その核融合というやつがだんだん成し遂げられてく。二つの核があるけれども、そして今までは別々に円を、円を描いておったけれども、核を中心ね。それが一緒になることによって、その円形の、円の縁がね、お互いに溶けてきた。そして核は核であるけれども、楕円形にだんだんできておるんです。今ね、楕円形に。そして、こう二つをめぐる楕円がずっつとできています。

(中略)

このトーンは、楕円の奏でるトーンは、最初の円が奏でていたトーンがあったのと比べると、違うトーンになっている。この楕円の奏でるトーンがね。音楽的な言葉を使ってね。そういうことです。子どもたちのパーソナリティもですね、この楕円を形成していくということなんです。先生との間に楕円形ができてきます。子ども同士の間にも楕円形ができていく。この集団指導というものを通して、一人ひとりの個性は確立していかねばならないけれども、その個性というのが、共同的なものが形成できるような個性に育っていくということなんです。(pp.39~40)

レッテルを剥ぐ仕事

そうして世の中がね、上に上に上にと伸びていくときに精薄の子どもたちは、横に横に横に根を張って生きていきますよ。これが本当の発達。上に上に上に根が枯れてしまうような上がり方でなくて、根を張ってズッシリと横に横に豊かな発達。こういうものをですね、私たちの生活の中に確立していくということを、特殊教育と世間は呼んでいる。また我々も、精薄と呼んでいますけれども、精薄と呼ばれている子どもがいるだけのこと。重症心身障害児というのは、言葉や歩くことの前で、つまづいている子どもたちのことを言うのです。そんなレッテルを貼って、問題が解決してしまうのではないですね。分かるでしょ、それは。レッテルを貼っちゃいけません。我々の仕事はレッテルを引っぱがす仕事で、我々の仕事なんだからね。世間と一緒にべたべた額に、これは精薄でございましてレッテルを貼っていくような仕事をしなきゃいけない。(p.45)

共感から共鳴へ

静かに己を抑えて、本当に本当の自由というものを、我々のものにしていくためのプロセスを、私は尊重したいと思いません。そういうものが国民に訴えるでしょ。我々はですね、憤激して火花を散らしている者を見て、ビックリは致しますけれども感動は致しません。人を驚かすことはできても感動させなきゃいけないです。腹の底から揺さぶりをかけていけるものでなければいけない。精薄対策もそうです。ただいたずらに憤激してだけいけないで、一人から一人へ、またもう一人へですね、揺さぶりをかけて響きあっていくというような、その浸透の仕方をですね、説得をしていながら、そして人間というものはどういものだろうかということと一緒に、生活の中で深く考えるってことが大切ですね。(p.20)

講義冒頭でのミットレーベン

私は精神薄弱児とは何かというような勉強を大学なんかでしておられる方によく言うのですが、何かこう心理学の方のね勉強とか、あるいは医学の方から精神薄弱はどういうものをいうのかというような言い方で、いろいろと研究的に話がなされますことに対して、それは勉強は勉強だから一応してもいいけれども、やはりこういう施設なんかにくると、一番良く分かるから、まず施設においでなさい。それから、施設で子どもとですね、一緒に暮らしてごらんなさい。そういうことが一番手取り早いし、また、良く分かることなんだということをお話しております。そこであの、大学なんかでは、頭の勉強だけをしているんですね。その理屈のほうを一生懸命で勉強をしておるんですけども、本当にこの解ろうと思えますと、何と言っても一緒に暮らすのが一番いいわけなんです。(p.6)

講義中盤でのミットレーベン

この産まれてくる子どもさんたちをがっぷりと抱きしめて、親も施設も教育も、そしてその現実の中から、行動の中から、私たちはこの施設を例えば例にとれば、施設の行動実践の中から、問題を掘り下げ掘り下げて、新しい社会が建設されるための砦としての役割を果たしつつあるわけです。こういう考え方というものを行動的理論と私は言いたいと思うのであります。実践的理論ということ言いたいのであります。大学の研究室で、またはそういう子どもたちとの肌の触れ合い、「ミットレーベン」無しに、立ち止まって傍観的にものを考えて済むことでは無いということですね。それを、私は中心に置いて考えて参りたいというふうに思うわけなんです。(p.32)

講義中盤でのミットレーベン

現在の体制に対して補完的役割をしているというならば、それは結構なんです。しかし、単にこれを補うだけじゃなくて、それは一つの出発への拠点でもあるということと同時に合わせて考えて、そして実践を続けていくのです。それは立派な、正しい政策や施策が確立するように。それは、改良主義と言われても構いません。どんなに改良主義だと言われても、今日よりも明日、明日よりも明後日と、正しい施策や政策というものが、この子どもたちの幸せの方向において、築かれていくための努力を社会全体の人と一緒にやると。一緒にやると中核には、「ミットレーベン」がそこにあるということ。この「ミットレーベン」を中核にしなから、この子どもたちの世話をしながら、そして現実を切り拓いていくという新しい未来を切り拓いていくという働き、ここに本当の意味の国民大衆と共に、そこにソーシャル・アクションが起こってくるという理解の仕方を、私たちは持つべきでないかと思うのです。(pp.32~33)

講義中盤でのミットレーベン

だから尻を拭いて、尻を拭くというような、鼻をズルズルの鼻をかんでやるというような、手にその感触がいつまでも残るような「ミットレーベン」の中で、初めて発言ができるというような発言もですね、私たちは尊重しなければなりません。

それは、一隅を照らしているからであります。そんなことは、天下国家に関係が無いと人は言うかも知れません。言われてもいいです。言われたって構わない。

しかし、必ずこの一隅を照らすところから、この子らが世の光となってくるのです。この世の光となってくるこの光というものが、この子らの存在そのものが、光輝いていくような、そういう育てというもの、教育というもの、指導というものが、社会の財産になる。専門職というのは、そういう働きをして下さる方々なんです。(p.33)

講義終盤でのミットレーベン

…ですから是非ご覧下さい。そして、その中から何かをつかんで下さい。それは私たちに非常にたくさんの大きなね、基本的な技術を与えてくれます。技術を。

その技術は、子どもたちとの「ミットレーベン」から生まれてきます。頭の中だけから、空念仏からは生まれてまいりません。「ミットレーベン」の中から無限に技術が湧いてきます。そして新しい技術は、次の生活を保障します。次の生活は、また新しい技術を生んできます。このクリエイション。この創造、創造的作業、創造活動っていうものが、教育なんです。教育というのは、古めかしい教科書の中に閉じ込められているようなものでは決してないということです。精神薄弱や重症な子どもさんたちとの毎日の触れ合いの中に、実に素晴らしい人生にとってかけがえのない生きる喜びと技術が、その中に隠されているということ。(p.44)

西田哲学における“mitleben”

しかし芸術作品はやはり何かを写すとか、表現するとか考へられる。では何を表現するのかと云へば、私はそれは真実在を写すのだと云つてよいと思ふ。無論、真実在とは何かといふことはむづかしい問題であるが、私は真実在とは我々が直接に体験する生きた生命だと一応云つておかう。時間、空間、因果律といったもので統一された物理的現象の如きものではなく、ベルグソンの所謂純粹持続の如きものが真実在である。我々はそれを概念的に分析して知るのではなく、云はばそれと共に生きること、即ち mitleben することによつてそれをぢかに知るのである。例へば花を見る時に、花卉は何枚あるか、といふやうなことをいくら正確に数へても、それでは真実の花の生命に触れてゐるのではない。我々は花と mitleben(共に生きる)ことによつて花の真相に触れるのである。

西田幾多郎「哲学概論」『西田幾多郎全集』第15巻、岩波書店

糸賀(1952)「生活即教育」『南郷』第12号より

われわれは本来お互いに「今ここに生きている」という実感の中にある。この生命の実感は理屈ではなく、まず何よりも肉体的な感覚であるのだが、この生命の実感の中には、肉体的から精神的なものまでの、実に様々な要素が盛り込まれているものであって、究極するところ、生命は幸福の実現を追求して行く一つの流れであるといえるかも知れない。

テカルトが存在の根源をたずねて「我惟う」と言ったように、メーヌ・ド・ピランは、「根源的事実」を探求してそれを出発点とし、ベルグソンは「生命の躍動」を説き、西田幾太郎氏(原文ママ)は「純粹経験」を深く味わった。そのようにわれわれも最も端的に生命の根源的事実にさかのぼるような純粹な体験を味わってそれを万人共通の出発点とするのでなければなるまいと思う。

此の直観は、一切の意欲を生み出す深い根源であるとも言える。それと同時に、相対に対して絶対を、有限に対して永遠をさし示すものでもある。

田村一二の流汗同労

本を読んでも、話を聞いてもなかなかわかりにくい障害児・者への理解を、体験入村をしてもらって、寝食を共にし、一緒に作業をして、いわゆる「流汗同労」の形態の中で「相手の立場になって考えられる」つまり「愛」を掴んでもらう。障害のある人たちへの「広い心」「あたたかい目」を得てもらった人が、又もとの社会に戻ってもらう。このようなあたたかい「目」が一つ二つと増えていって、この目の層が厚くなるのが本當の福祉だと私は思っている。

つまり、学生、生徒たちは、ボランティア活動として施設へお手伝いに行く。そこで子どもたちの「流汗同労」或いは「遊戯開心」の形態をもって接触する。この接触によって、相手のことがよくわかり、そこから、相手の身になって考えることができ、相手の立場になって考えることができるようになる。これを、亡き糸賀一雄先生は、「愛とは相手の立場になって考えられるということだ」と教えて下さった。この言葉は骨身に沁みて忘れられない。

田村一二「賢者モ来タリテ遊ブeshi〜福祉の里 茗荷村への道〜」(NHK出版)

人間としての生きがいを感じられる社会に

この世のなかには、全体としてどんなに繁栄があっても、そのなかで不幸に泣くひとがひとりでもいれば、それは厳密な意味で福祉に欠けた社会といわなければならないと思う。社会福祉という言葉の意味は、社会全体の組織のなかで、一人ひとりの福祉が保障される仕組みをいうのである。経済的な意味でも社会的な意味でも、不平等や差別感が克服されなければならない。そしてひとりももれなく、人間として生まれきた生きがいを豊かに感じられるような世の中をつくらねばならない。それは理解と愛情を中核とした社会の理想像である。

「社会福祉の実践を」京都新聞1968年7月4日付
出典『糸賀一雄著作集Ⅲ』p.357

遠藤六朗「重症心身障害児(者)福祉と『共感』の再生に向けて」
『糸賀一雄「この子らを世の光に」ひかりの顕現』中川書店

糸賀の「共感」は「共生」という意味に近いのかもしれない。単なる憐れみや同情ではなく、障害のある子どもといっしょに一人の人間として立ち上がる、そのことを指している。「ありのまま」ということは糸賀の「アガペー的な理解」ということでもある。「(障害のわが)子をだきしめて、その生命を絶対肯定しているような、そのような母性愛が教育の根底によこたわっている」。これがアガペー的愛＝共感であるとすれば、「しかしこの母親は、その子が成長して、生活や行動の上にあられる一歩一歩の向上を無限のよろこびをもって見守るであろう」という愛は工口式的な愛、つまり、アガペー的共感から立ち上がる共生＝共感である。

糸賀の共感思想

精神薄弱児自身を知るということは、精神薄弱児の一般論を知るということではないのでございます。つまりその子どもと、私なら私が、運命的な、なまなまいつなかりをもつということにおいて、その子どもの中に入っていくことができる。向こうももちろんこちらの中に入ってくる。こういう一対一の間関係においてしか子どもを理解することはほんとうはできないはずでございます。それが私は教育というものの真の姿であるべきだと考えております。

出典：『糸賀一雄著作集Ⅱ』p.300

糸賀の共感思想は、障害者と健常者との感じあえる世界、人格的交流の世界。障害者を一般的・知的に理解するというより、個人の面に入り、個人に共感するといった、感情の作用を含むもの。

洪・松矢・中村(2001)「糸賀一雄の『共感』思想に関する考察」『心身障害学研究』25号

ミットレーベンによる「共感」

ミットレーベンという純粹経験から出発した「共感」。この「共感」を中核とした「新しい社会」の建設を求める。

障害や欠陥があるからといってつまはじきする社会を変革しなければならない。しかし変革は突然にやってくるのではない。社会のあらゆる分野で、人びとの生活のなかで、その考えや思想が吟味されねばならない。基本的な人権の尊重ということがいわれる。しかしその根本には、ひとりひとりの個人の尊重ということがある。おたがいの生命と自由を大切にすることである。それは人権として法律的な保護をする以前のものである。共感と連帯の生活感情に裏づけられていなければならないものである。

出典：『福祉の思想』p.15

「共感」の経験から、「自覚」が生まれ、そして「責任」を分かち合おうとする意識が生まれる

鳥取県立図書館2階に設置された
糸賀一雄顕彰プレート

顕彰プレート披露会
(2014.11.1)

糸賀の後輩・鳥取東高等学校書
道部によるパフォーマンス作品